

地球環境問題と幸福論

川田洋一

「1」はじめに——東日本大震災の教訓

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、巨大地震と広範囲の津波による災害に加えて、福島第一原子力発電所の事故による放射能汚染を引き起こした。

こうした災害は、日本人の心に深刻な影響を及ぼした。まず、日本人の幸福観が劇的に変化したのである。これまで重視しがちであった物質的幸福よりも、

精神的な幸福を求める人が増加したのである。つまり、「金」「商品」といった物質的な欲望の実現に幸福の基準を求めるのではなく、心の豊かさや、人と人の「つながり」「絆」などの精神的・心理的幸福へと大きく傾いたのである。

このような大災害は、心的外傷後ストレス障害（PTSD）をもたらし、また、うつ病などの心の病の発症のリスク・悪化を引き起こすものである。心の健康を取り戻し、心の幸せ・安定を確立するために

も、人々の温かな心による精神面の支援が必要とされるのである。

今回の震災により、多くの日本人が物質的な欲求を満たすことで得られる幸福の「儚さ」^{はかな}を実感している。例えば、生涯をかけて購入した住宅が一瞬にして流されたり、津波によって家や車や財産が跡形もなく流された人もいた。沿岸地域の家屋や田畑は泥水に飲み込まれ、工場や漁業関連の施設も失われてしまったのである。

そして、東京電力の原発事故は、物質的次元の幸福の「儚さ」を示す象徴となった。原子力エネルギーにより、日本経済は高度経済成長を遂げ、物質的には世界最高レベルの豊かさに達している。しかし今回の事故は、日本にあまりにも深く大きな爪痕を残し、日本のみならず全世界に原子力利用についての大きな議論を巻き起こすに至っている。

池田SGI（創価学会インタナショナル）会長は、平和提言「生命尊厳の絆輝く世紀を」において、エネルギー政策の転換を訴えている。

「日本のとるべき道として、原子力発電に依存しないエネルギー政策への転換を早急に検討していくべきです。」

そして、再生可能エネルギーの導入に先駆的に取り組んでいる国々と協力し、コストを大幅に下げたため共同開発などを積極的に進め、エネルギー問題に苦しむ途上国でも導入しやすくなるような技術革新を果たすことを、日本の使命とすべきではないか。

また、その転換を進めるにあたっては、社会や経済に与える影響を考慮し、これまで原発による電力供給を支えてきた地域に、他の産業基盤の育成を含めたさまざまな手立てを講じていくことも必要になると^①思います」

日本人は、日本の歴史における未曾有の大災害によって、物質的幸福の「儚さ」から心の豊かさ、人と人との「絆」の温かさ、さらには自然支配の物質主義の文明から精神性、文化性を尊ぶエコロジカルな文明への転換の必迫性という、人類社会の未来にとって極めて示唆的な教訓を得たのである。

「2」真の幸福を求めて

1972年にローマクラブが出したレポート『成長の限界』から40年後、その作成に携わった若者の一人、B Iノルウェービジネススクール教授のヨルゲン・ランダース博士が『2052——今後40年のグローバル予測』のなかで、地球と人類のこれからの「40年後」を予測している。

ここでは『成長の限界』のコンセプトを引き継いで、人類が向き合わなければならない課題、危機のあり方を予測している。

ランダース博士は、産業革命の次に「持続可能な革命」が現在の豊かな国からはじまり、今世紀中に世界全体に広がると予測し、次のように述べている。

「この未来社会がどのようなものになるか、私は正確に述べることはできないが、その社会が目指すのが『化石燃料による経済成長』ではなく、『持続可能な幸福』であることは間違いない。(中略)

最終的に世界は太陽エネルギー(太陽熱や太陽光発電

など直接太陽から得るものと、風力、水力、バイオマスなどを介して間接的に得るもの)によって動くようになる。そしてその世界では、物質的な豊かさだけでなく、人間の幸福に焦点が当てられるようになるだろう」⁽²⁾

ランダース博士は、人類が直面する二つの課題として、貧困と気候変動をあげている。貧困が蔓延し、さらに深刻なことに、気候変動の自己増幅がおこると予測している。博士はそのための対策を次のように述べている。

「貧困に関しては、これまで経済団体の協力のもと、ほぼ50年にわたって開発援助と実験が行われ、貧困国が長期的に経済成長を遂げるには、政治の安定と、すべての国民、特に女性に教育を施すことが重要だということ(3)がわかった」

次に、気候変動については「地球社会は(a)エネルギー効率を上げ、(b)再生可能エネルギーに切り替え、(c)森林破壊をやめ、(d)CO₂の回収・貯留(CCS)を行わなければならない」⁽⁴⁾と言う。またそのために経済の再構築が必要であり、「気候に優しい解決策が市場

で競争できるよう、法律で後押ししなければならぬ⁽⁵⁾」と指摘している。

このような対策において、富裕国の人にとって嘆かわしいのは、今後40年にわたって実質的な賃金が上がらず、おそらく可処分所得が減るということである。

そこでランダース博士は、これらの対策が有効に行われるために、「消費が減るといふ事実を受け入れ、以前とは異なる方法によって幸せを追求するのだ。(中略)もし全人類がともに手をたずさえて、物質的な利益ではなく真の幸福を目指すべきだと主張すれば、その目標は支持されるだろう⁽⁶⁾」と提案している。

つまり、貧困を克服し、激しさを増す気候変動を乗り切るために、人類が物質的な利益ではなく、真の幸福を目指すべきだといふのである。

ランダース博士は、収入を得ることより満足を得ることに目を向けるべきであると言う。

「人生においては満足を得ることがいちばん大切だといふことを思い出そう。自分を幸せな気持ちにして

くれるのは何だろうか？ 何が自分を満足させるだろう？ (中略)

これらの問いの答えは、できるだけ多くのお金を稼ぐことだけを考えている人にとっては、はっきりしている。金を儲けるというのは明快で具体的な目標であり、人生を満足のいくものにする助けとなる。だが、「経済的成功だけを追う人生は、案外脆弱なものだ。もし、あなたの金儲けの方法が違法と見なされたり、あるいは配偶者が去ってしまったら、子どもや友人があなたの目標を評価してくれなかったりした場合、それでも幸せだと言えるだろうか。(中略)

常識的な人なら、熟慮を重ねれば、人生の目標はそれほど単純でないということに気づく。それは、『満足感を最大にすること。一定の金額以上の収入を得るという条件つきで』⁽⁷⁾と言えるかもしれない。

そして、「報酬はそれほど多くなくても満足を得られる仕事」「自分の信じるもののために働き、ある程度の成功を収める」⁽⁸⁾などの例をあげている。

人間生命には、物質的欲求から精神的・心理的欲

求、社会的欲求、そして宗教的欲求等の千差万別の欲求や願望があり、その充足によってさまざまな性質の幸福感が味わえるのである。

そこで、人間生命内在の欲求、願望と幸福感を位置づけるために、心理学の側面から「人間性心理学」のアブラハム・マズローの「欲求階層説」を取り上げたのである。

〔3〕 マズローの「欲求階層説」を超えて

マズローは、すべての人間生命に内在するさまざまな欲求を、段階的に整理している。

第一に「生理的欲求」である。

第二に、「安全の欲求」である。

第三に、「所屬と愛の欲求」である。

第四に、「承認の欲求」である。

マズローは、この四つの欲求は人間としての基本的欲求であるという。そして、この四つの段階は、低次の欲求が満たされると、より高次の欲求へと段階的に進んでいくという。すなわち、第一の生理的欲求がか

なえられて、第二の安全の欲求がかなえられる。そして次に第三の所屬と愛の欲求、第四の承認の欲求の発現へと進むというのである。

しかし、マズローは、この四つの基本的欲求がかなえられると、第五の「自己実現の欲求」が発動してくるという。この欲求は成長欲求である。

マズローの描く幸福は、四つの基本的欲求をかなえ、その基盤の上に自己実現をなすべく人間の幸福感・充足感である。マズローは晩年になって「自己実現の欲求」を超えた「自己超越の欲求」を主張している。そして、スタニスラフ・グロフとともに創設した心理学を「トランスパーソナル(超個)心理学」と名付けている。

このようなマズローの、「個」から、それを超えて、「超個」の領域への志向性を、仏教の視座からとらえなおし、人間の欲求(成長欲求)として、次の二つの欲求を自己実現の欲求の上に設置したのである。つまり、第六に、人類共生の欲求、第七に、根源的・宇宙的欲求である。

第六の人類共生の欲求とは、この地球上のすべての

人々が、これまでの四つの基本的欲求をかなえ、さらに、それぞれの自己実現を成し遂げつつ、ともに助け合って成長していこうとする欲求である。個人の生命内奥から顕現するこの欲求は、「個」の生命を超えて、「超個」（トランスパーソナル）の領域、すなわち、家族、地域、民族、国家、文化、文明、宗教そして人類の次元へと、拡大し続けるのである。しかも、この欲求は、仏教の縁起の法が指し示すように、「相依相資」の智慧に照らされて広がっていくのである。つまり、他者と相互に依存し合いながらも、しかも、相互に資け合^あって、「豊かな生」を築きあげようとするのである。

そのために「縁起・共生」の智慧は、慈悲、すなわち他者の不幸に「思いやり」をもつて「共鳴」しつつ、ともに苦悩を乗り越えて幸福を築きゆくための善なるエネルギーとともに発動してくるのである。「縁起・共生」の智慧と、「慈悲のエネルギー」が一体となつて、「他者」への貢献・援助の行動を起こすのである。それ故に、人類共生の欲求は、他者貢献の欲求ともい

い得るであろう。

このような欲求に基づく行動が、内在の善心——友情、信頼、非暴力、貪欲のコントロール、平等心、勇氣——を顕在化させ、強化しつつ、自己自身の境界を拡大していくのである。そして、ついには、民族心や国家心を超えて、人類心と一体となる領域にまで至るのである。

こうしたプロセスを支える基盤が、第七の根源的・宇宙的欲求である。この根源的な欲求は、地球生態系と共生しつつ、人類意識を宇宙意識にまで高め、拡大していくのである。

大自然に憩いつつ、大宇宙の流転のリズムに生きる喜びのなかに、^{〴〵}永遠なるもの^{〴〵}、^{〴〵}根源的なるもの^{〴〵}を身心全体で感受していけるのである。それは、まさに宗教的境地であり、マズローの「至高体験」、チクセントミハイの「フロー体験」を引き起こす源泉である。そのような至高の境地から、万物との一体感を味わいつつ、自らを生かすもの、^{〴〵}永遠なるもの^{〴〵}への感謝の念がわき起こってくるのである。その一念が、

慈悲の心となって発現してくるのである。

〔4〕 持続的な幸福社会の創出

人間が幸福で真の「豊かさ」を生きるための、仏教からの指針を示した経典がある。

「仏遺教経」には、「知足の法は即ち是れ富樂安隱ふらくあんいんの處ところ、知足の人は、地上に臥すと雖も猶安樂あんらく為り」とある。その一方で、「不知足の者は富むと雖も而も貧し」⁽⁹⁾とも記されている。つまり、「知足」の人生は安樂であり、幸せであり、一方、「不知足」の人生は、たとえ物質的に富んでいるようであっても、貧しく、不幸であるとの意味である。このような、「知足」は豊かで幸福であり、「不知足」は貧しく、不幸であるとの価値観を、前章で詳述した「七つの欲求」の段階説に当てはめてみると、次のようになるであろう。

「知足」とは、人間生命の内奥から顕在化する七つの次元にわたる、すべての欲求を充足して生きることである。基本的欲求（四つの欲求）の充足の上に、成長欲求をかなえつつ、宇宙生命と一体となって生きる

人生へと至るのである。たとえ、物質的に豊かであっても、他の欲求を発現していない生は「豊か」とはいえない。同様に、権力、名誉、名声等の社会的・心理的欲求にとらわれて、成長欲求を無視しての生も、けっして「豊か」とはいえないのである。

ところで、生命内奥にそなわる「七つの欲求」のすべてを顕在化するためには、個人の努力とともに、その生命を取り巻く社会も、幸福で真の豊かさをそなえていることが必須となる。

では、そのような持続する幸福社会をどのようにして創っていけばよいのであろうか。

先述した「七つの条件」をかなえる社会の条件を考えてみたいのである。

第一の「生理的欲求」を満たすためには、社会が、食糧、水、衣服、住居を保障することである。つまり、「人間の安全保障」のなかの、食糧・経済・環境面の保障である。そのためには、社会にある程度の経済力が必要である。また、環境からの安全保障のためには、自然生態系と調和する循環型社会、再生可能エネ

ルギーの活用社会が求められる。

第二の「安全の欲求」は、まず、医療、保健、福祉の安全保障（病気からの自由）が求められる。また、暴力やテロの恐怖、犯罪からの保障も求められる。そのためには、福祉制度とともに、軍事面における安全保障も必要である。さらに軍縮から不戦社会への移行が求められる。つまり、「平和に安全に生きる権利」の保障である。そのためには、少なくとも秩序が安定した社会が要請される。秩序の崩壊した社会は、不幸である。

第三に、「所属と愛の欲求」のためには、まず、基礎教育の保障、職業選択や技術修得、機会の保障がある。そのためには、社会自体が相互信頼に基づいた「信頼社会」である必要がある。互いに「信」を根本として、信頼の「絆」で結ばれた社会の保障があつてこそ、個人の所属や愛の欲求がかなえられるのである。

第四の「承認の欲求」では、自己自身の尊厳性に目覚め、誇りを持ち、自由、平等等の基本的人権を主張

する段階に入っていく。

一人の人間として、社会的自立を目指し、自由意思に基づく人生への欲求である。この欲求をかなえるには、社会に基本的人権への安全保障がなければならぬ。つまり、自由、平等、思想、言論の自由等の保障である。高等教育までを含む教育制度を確立しつつ、社会的自由を保障する社会である。民主的な選挙や政治、経済等の意思決定への参加が保障されなければならない。

第五の「自己実現の欲求」をかなえる社会には、この欲求を支え、刺激し、強化するために、その民族や社会が育んできた独自の精神的遺産を保護する体制がある。文化、芸術、思想、哲学、倫理に内包された豊かな人生観、価値観、生命観、倫理、道徳観が、自己実現の欲求を啓発する源泉となり得るのである。それ故に、一般に人類の精神性、倫理性を尊重する社会が要請される。さらに、郷土や国土の大自然そのものが、人間生命を啓発するのである。

第六の「人類共生の欲求」、「他者貢献の欲求」に基

づく行動を支える基盤は、文化、民族、文明、宗教の多様性を尊重し、共生、共存を認める寛容性に富んだ社会環境である。人類は、この地球上で、多様多様な民族文化や文明を創造しつつ、さらに、相互に関連し、交流し合うプロセスのなかで、部分的には融合しつつも、それぞれの独自性を発揮してきたのである。

自然生態系との共生、交流のうえに、異なる文化、民族、文明を相互に尊重し、啓発し合う多文化共生社会を基盤にして、衆生の善心の連帯が広がりゆくにつれて、人類共生、他者貢献の欲求がかなえられるのである。

人間生命の内奥から顕在化する生命成長欲求は、人類生命を超えて、自然生態系から大宇宙そのものへと拡大していくのであり、そこで第七の「根源的、宇宙的欲求」を自覚するに至るのである。この究極の欲求に応えるのが宗教である。それ故に、宗教の自由を保障し、宗教心を尊重し、大切にする社会こそが、持続的な幸福社会の基盤となるのである。

法華経では、釈尊の覚知した「永遠なるもの」――

ダルマ（法）を、寿量品において「久遠の仏」と一体の「久遠の法」として説いている。日蓮は、その究極の法を「南無妙法蓮華経」と表現している。

世界の偉大なる文明や宗教は、その源流に脈動している。宇宙永遠なるものから絶えざる生命力を汲み取りつつ、創造的發展を成し遂げている。宇宙生命根源の力には、慈悲、人類愛、智慧、勇氣、意志力をはじめとして、知性、理性、良心などのありとあらゆる「善心」が包含されている。それ故に、それぞれの文明や宗教は、他の異なる文明や宗教との対話、交流を通じて、「永遠なるもの」宇宙的なるものから流出し、横溢する宇宙生命の根源力と、そこに内包された「善心」を敬意をもって学びとらなければならないのである。文明間対話、宗教間対話によって、それぞれの文明や宗教は、常に新しい創造力を得て、自己自身を革新していけるのである。こうして、各文明や宗教が、ともに学び合い、啓発し合いながら、人類益に根ざして、現代地球文明社会に襲い掛かる問題群と対決し、超克していこうとする「対話・交流」の場から発

せられる智慧こそが、人類総体の安全保障への導きの光となり、幸福社会を創出していくのである。

法華経寿量品には、「衆生所遊樂」⁽¹¹⁾とある。この人生を自由に「遊樂」する境涯である。現代社会における「衆生所遊樂」は幸福論の視点からすれば、「七つの欲求」のすべてを顕在化して生きる自由なる人生である。

法華経寿量品には、「我此土安穩」⁽¹²⁾とも記されている。その現代における具現化は、まさに人間の「安全保障」を指している。つまり、「我此土安穩」とは、生命の内奥から顕在化する「七つの欲求」の脅威を除き、その発展を促すような衆生社会——つまり、自然生態系と共鳴する文化・社会的生命である。

現代物質科学文明のなかで、世界市民がその「善心の連帯」の輪を広めつつ、「衆生所遊樂」と「我此土安穩」を具現化する行為によって、文明の基盤が、利他主義へと変革され、精神性、倫理性に輝く持続的な幸福社会がその姿を現すのである。

SGIは、国連のNGOとして、現代社会のなかに

おいて、すべての人の幸福社会の創出のために、平和・文化・教育等の分野で活動している。

そのなかで、人道支援としてはこれまでも、中国の四川大地震やミャンマー・サイクロン被害への義援金提供、また、日本国内では、阪神淡路大震災、新潟県中越沖地震には、地元の会館の提供や物資の受け入れ、また、青年部、ドクター部、白樺会（ナースのグループ）の派遣、救済物資の搬送等を行っている。

今回の東日本大震災においては、日本の各宗教団体も災害支援の活動を行っている。震災死者の葬儀と慰霊、義援金、救済活動、避難所提供、物資の補給から「心のケア」にまで及んでいる。

創価学会の活動は、これらのすべてにわたっているが、ここでは、東日本大震災に対してどのように動いたのかについて、発生直後から時系列で整理しておく⁽¹³⁾たい。

3月11日

14時46分

東日本大震災発生 創価学会の会館も

会員も大きな被害を受ける。

14時49分

「東日本大震災災害対策本部」を学会本部と東北に設置。

15時05分

東北文化会館に最初の避難者が到着。学会員のみならず、すべての人に会館を提供。

また、東北文化会館は要請を受け、消防車20台を受け入れ。この日の深夜、避難者は約600名に。

3月12日

2時18分

山形・米沢から救援物資が東北文化会館に到着。

6時35分

東北文化会館で避難者に朝食（おにぎり、水、ソーセージ、お菓子など）を配布。

新潟から発電機と重油、おにぎり等が東北文化会館に到着。関西から救援物資が到着。

東北の30会館に約2500人が一時

避難。

3月13日

学会本部がドクター部、白樺会を東北文化会館に派遣。

医師やナースによる身心両面にわたる

医療支援が行われる。

北海道から救援物資車両が岩手に

到着。

それ以後の代表的な動きとしては、3月16日に被災地で座談会を開催。また、全世界のSGIがそれぞれ現地での日本の復興祈念の集会を開く。

3月19日には、東北学生部有志による「自転車レスQ隊」が結成され、ひとり暮らしの高齢者の買い物代行などのボランティアを行う。

3月21日には、東日本大震災の犠牲者を追善する彼岸勤行法要を、全国の主要会館、墓地公園等で行う。

3月24日から被災地で「希望・前進座談会」を随時開催。

3月30日、学会本部から東北各県に義援金を寄託。

4月3日、東北音楽隊が避難所にて演奏会。壮年・

「男子部による「かたし隊」が市内（石巻市）を清掃。

4月6日、仙台の教育者が、避難者の子供たちにもメンタルケア。

4月12日、美容師の有志が被災者への「ボランティアカット」を開始。

このように、人道支援は、死者への追善、基本的ニーズの充足、心のケアまで、物心両面に及んでいたのである。

東日本大震災は、生き残った人々から、「七つの欲求」のうち、第一の生理的欲求、第二の安全欲求という「基本的ニーズ」を根こそぎ奪っていったのである。

しかし、人々は互いに助け合い、信じ合って、絆を強めつつ、復興に立ち上がっている。第三の所属と愛の欲求や第四の承認の欲求を、お互いに発現し合ったのである。また、自らが被災し、親しい人を亡くし、基本的ニーズをかなえられない状況にありながら、他者への貢献に尽くした多くの人々がいる。自己実現の

欲求や自己超克の欲求に促され、利他の行動を起こした世界中の人々がいる。日本全国、世界からの繋がり（善心の連帯）である。

そして、そのような共同活動のなかで、日本人は、物質的なものの「儂さ」とともに、人間の「絆」の尊さ、信頼の心で結ばれた社会の重要性を改めて感じたのである。

注

(1) 第37回「SGIの日」平和提言「生命尊厳の絆輝く世紀を」〔聖教新聞〕2012年1月27日付。

(2) ヨルゲン・ランダース著／野中香方子訳「2052——今後40年のグローバル予測」日経BP社、35ページ。

(3) 同書、426ページ。

(4) 同書、427ページ。

(5) 同書、428ページ。

(6) 同書、429ページ。

(7) 同書、432ページ。

(8) 同書、432、433ページ。

(9) 「佛垂般涅槃略説教誡経」（亦名仏遺教経）、『大正蔵経』巻12、1111ページ。

(10) 同書。

(11) 『妙法蓮華経並開結』創価学会、491ページ。

(12) 同書。

(13) 『潮』編集部編／『東日本大震災——創価学会はどう動いたか』潮出版社、197～203ページ。

(かわだ よういち／東洋哲学研究所所長)